



オトナにしてくれるの？お兄ちゃん？春編

野菜箱

春休みの時期、俺は生徒会の手伝いで学校に来ていた、気候は暖かく気持ちよく氣候だった俺はいつもの教室に入ると、同じく生徒会で仲の良い田中と斎藤が談笑してる姿が見えた。

「おはよー」

「おう！ おはよう！」

田中は笑顔で挨拶を返してくれて、斎藤はどこかよそよそしい感じだった

「あれ？　なんか元気ないな？」

「ああ……実はさ……」

斎藤が言いにくそうにしていると、ニヤニヤしながら田中が

「こいつ彼女とやったらしいぞ」

「えっ!? まじか!!」

「ちよ!! 言うなっつて!!」

斎藤は焦ってる様子だったがどうやら本当らしい、俺には彼女なんていないし正直羨ましかった健全な高校2年生からしたらすごく気になる内容だ

「ど、どんな感じなんだ? どこでやったんだ? 気持ちよかったのか?」

興味津々な顔をしながら聞くと斎藤は少し照れくさそうな顔をしていた

「いや〜それが普通だよ〜?」

そういう言いつつ少し得意顔になり斎藤は詳しく教えてくれた。

場所は斎藤の部屋で彼女は親がない時に来てくれて、そしてキスをしてそれから服を脱いでお互い裸になって……

そんな話をしているうちに担当の先生が来て雑務を依頼されるが頭の中はセックスのことばかりだった

(早く卒業したい……)

そんなことを思いながら時間は過ぎていった。

13時半ごろに雑務作業自体が終わり家に帰る、俺の地元はクソ田舎で田んぼまみれだ、遊ぶ所は小さい空き地や山、川くらいしかない。

そんな田舎でも、少し遠くを行けば駄菓子屋、カラオケもあるしコンビニやスー

パーだつてあるからそこまで不便ではない、自転車で季節を感じながら帰る、いつも通る帰り道ふと公園を見ると、歳の離れた小学校4年生の妹事、「柵町風子」と同じく小学4年生の「穂波結衣」と遊んでいた。

妹の風子は髪の毛が短めで活発的で元気いっぱいだが、結衣はとても大人しく内気な性格で髪は白くふわふわしている、しかし二人ともとても可愛い容姿をしている、小学生でまだまだ幼いが将来絶対美人になるだろうという見た目だ、性格は正直、正反対な二人だがとても仲が良く、二人で公園や山や川で遊ぶ遊んでいる、俺は二人が、山や川などは俺が二人のお目付役になることが多い。自転車を止めて、そんな二人を眺めていると風子が俺に気づいたらしく手を振り走ってくる

「お兄ちゃん!!」

満面の笑みを浮かべながら抱きついてくる風子の頭を撫でる、風子の後ろからついてくるよに穂波結衣は近づいてきた

「こんにちわ……」

結衣は恥ずかしがりながらも小さく手を振ってくれた可愛い

「おお、こんにちは」

軽く挨拶を交わして帰ろうとすると、風子は俺の手をひっぱり可愛い笑顔で

「ねえ！ 一緒に遊ぼうよ！」

俺は少し考えた後断る理由もないと思い軽く承諾した、すると風子と結衣は嬉しそうに「やったー」と言ってくれ、おままごとをしたり、三人で鬼ごっこをしたりして遊んだのだが風子が鬼ごっこの最中に木の根につまづき転んでしまった、慌てて駆け寄ると膝を擦りむいていた、血が出ていた為ポケットに入っていたハンカチを取り出し止血をする幸い傷口は大きくなり、出血量も多くなかった。

ホツとしていると結衣が風子のことを心配して、泣き出しそうになるその光景を見た瞬間、何故か心臓の鼓動が早くなり体が熱くなる感覚に襲われた、結衣の目からは涙が溢れて今にもこぼれ落ちそうだった、自分の奥底でゾクゾクする感覚が来る…

「お兄ちゃん…?」

風子の声で現実に引き戻されるはつとする、俺は結衣ちゃんをきにしつつ風子に

「風子怪我したし、一度家に帰ったほがいいな、二人ともそれで大丈夫か？」二人は首を縦に振り肯定してくれた、家に帰っている間、俺の頭の中ではさっきの出来事が離れなかった、なぜこんな感情になったのかわからないがとにかく胸の奥がモヤモヤする、だがなんとなくだが分かる、俺は結衣に劣情を抱いている、正直このくらいの年齢の子に劣情を覚えている事実に背徳感でさらに興奮してしまう。

俺の家は田舎によくある一軒家で庭付きだ、いつもであれば母さんはパートに行っているが今日は珍しく家に居た、玄関を開けるとちようど帰ってきたところだったようでこちらに気付き

「大志と風子あらおかえりなさい結衣ちゃんもこんにちは、つてあら風子！

足どうしたの!？」

慌てながら靴を履き直して俺の横を通っていく

「ちよつとこけちゃって…」

「もう…:…気をつけないとダメじゃない、今日はもう15時だけど遊ぶのはやめときなさい」

「えくまだ結衣ちゃんと遊びたい」

そう言って駄々をこねるが母は厳しく言い放つ

「だめよ、17時には習い事だつてあるんだから、それにまだ春休みなんだしまた明日遊べば良いでしょう?」

それを聞いた風子は少し不満そうな顔をしたが渋々了承した、結衣は心なしかまだ遊びたそうだったが我慢しているようだった、俺は少し悪い考えが通り氣づいた時には、口が出ていた

「じゃ結衣ちゃんのこと俺が家まで送るよ、ちよつと遠いもんね？ 結衣ちゃんもそれでいいかな？」

そして結衣ちゃんの耳元に小声で

（風子は遊べないけど、俺と良ければ少し遊べるけど遊ぶか？）

すると結衣は目を輝かせながらコクリと首を縦に振る、母親はいつもの様子で

「そう、ならお願いしようかしら、お母さんこれから夕飯の準備しないといけ

ないから助かるわ、よろしくね」

「結衣ちゃん、また明日ね！」

「うん、風子ちゃん明日また遊ぼうね。」

結衣は笑顔で手を振る、風子は少し名残惜しそうな顔をしながらバイバイと手を振り返した。

それから俺は結衣を自転車に乗せ先ほどの公園へ向かった、道中結衣は楽しそうにして、時々俺の方に寄りかかりながら甘えるような仕草を背中で感じる、それが可愛くて仕方がなかった。

公園に着き自転車を置き、結衣と俺はブランコやシーソーなどで遊んだ、しばらくして俺は唯衣にある提案をした。

「山の秘密基地？」

俺のじいちゃんが持つている山があつて、その山は昔から山菜やキノコが沢山取れるため、地元の人から重宝されており、山にはいる時は管理をしているじいちゃんか俺の家に連絡を入れておくことになっていて山がある、以前じいちゃんが山に入る地元の人のために小さい休憩用の小屋を作ったのだが、最近新しい休憩用の小屋を作り以前の小屋は使わなくなったため、俺がじいちゃんにギターの練習がしたいと頼み込んで、好きに使って良いと許可をもらっていたのだ。

その小屋で結衣と秘密基地として遊ぼうと思つてる旨を話す。

結衣は最初こそ不安げな顔だったが、詳しい内容を話すと次第にワクワクとした表情に変わった。

「すごい!! あそこ好きに使つていいの? 結衣遊びたい!!」

俺は結衣の手を引き早速山に向かう、山は管理されているとはいえ、道から外れればすぐ迷ってしまふほど入り組んでいるが、それは慣れていな人の場合だ、俺や結衣は小さい頃からよく山に入っているので山道は熟知している。

それから5分ほど山道を歩くと目的地に着く、そこは使わなくなつたとはいえ、小屋周りには草が生えないように多少の石畳があり雑草対策をしている、小屋自体もしっかりしているので、雨漏りなどの心配はない、トイレは別で外にある。

鍵はポストの中に隠してあり、それを開けて中に入る、中は6畳くらいの広さで流し台付きで、畳が敷いてあり部屋の真ん中に小さい机と部屋の隅っこに数枚の座布団、一応電気と水道は通っており意外としっかりしている結衣は中に入り、中をぐるっと見渡した後

「大志兄ちゃんは、ここを好きに使っていいんだね！　すごい！」

そう言いながら結衣は嬉しそうに笑ってくれた、それがとても愛らしくて思わず抱きしめたくなったが何とか堪える。

そしておままごことがはじまる、結衣がお嫁さん役で俺は旦那さん役、結衣の作った料理の葉っぱを食べたふりをする。と結衣はとても喜んでくれた、そして夜の場面になり俺は結衣にある事を提案をする

「結衣ちゃん、大人になる儀式って知ってる？」

「大人に……なる……？」

結衣は不思議そうに首を傾げる

「そう、大人の男の人と女の人がすること」

結衣はいまいち理解できていないようでキョトンとしながら俺の方を見ながら答えてくれる

「うーんと……大人になるために、大人が教えてくれること……とか、かな……？」
「んー、ちよつと違うかな？」

やっぱり小学生だ、知らないとは思っていたが実際言われると興奮する、俺は結衣を抱き上げ胡座をかいている足の上に乗せる、急に抱き上げられたことで結衣は驚いていたが嫌な素振りは一切見せなかった。

そのまま優しく頭を撫でると結衣はくすぐったそうしつつも、足を伸ばして左右にゆらゆらし始め喜んでる様子だ、俺は一旦やめて再び質問する。

「結衣ちゃんは大人になりたい？ なりたくない？」

結衣は少し考えてから

「んー、なりたいかも……」

結衣は俺の胸にもたれかかるように体を預けてきた、その行動がとても嬉しくて俺は結衣の肩を掴み、向かい合う形で座り直す。

結衣は俺の目を見て少し照れている様子で俺に微笑む

「結衣ちゃん大人になる儀式やってみる？ 最初ちよつとだけ痛いけど、その後はずごく気持ちいいんだ」

結衣は痛いという言葉に少し怯えたような顔をするが俺を信じてくれてるのか小さくコクリとうなずく俺の中で何かが切れた音がした気がした、結衣を正面からギュツと抱きしめる

「うっ…大志、兄ちゃん…苦しいよお…」

「ああ、ごめん！ 結衣が可愛いからつい…じゃ始めるぞ？ 結衣は目を閉じていて」

そう言うのと結衣はゆつくりと目を閉じる俺も目を瞑り唇を重ねる、最初は軽く触れる程度に、そして徐々に深くしていく結衣は息継ぎが上手くいかず少し苦しそうにしているが、受け入れてくれてるようだ。

10秒くらいだろうかキスをした後に結衣を離すと、結衣はトロンとした瞳をし

ていた、そんな姿も可愛いくてたまらない

「どうだった……初めての大人のキスは……？」

「…わかんない……」

そう言って結衣は俺の胸に顔を埋めたきつと恥ずかしかったのだろう耳が赤い、その後しばらく二人でくつついた後、また俺がまた質問する

「結衣ちゃん、さっきの続きしてもいいかな……？」

「うん……」

「じゃ服を脱ごうか」

「え……」

もじもじとして結衣は脱ぐのを躊躇していた、俺は結衣パーカーに手をかけると結衣は抵抗する

「待って……自分でやる……から、」

結衣は立って、ちらを伺いながらもじもじと自分の手でゆつくりとパーカーを脱いでいく、その間俺はずっと見ていた。

結衣の白い肌が露わになっていく、胸はまだ膨らんでもないのを見ると、やはりまだまだ子供なのだと実感する、しかし胸の先端だけはほんのりピンク色に染まっていてとても艶めかしい

結衣は両腕で胸隠しチラチラこちらをみる、その姿も非常に可愛らしいが、

「どうしたんだ？」

「大志兄ちゃん、下も脱ぐの？ スカートやパンツも……？」

そう言われて結衣の下腹部を見る、すると結衣は足を内股にしてモジモジとさせている、俺は結衣の体を見るだけで興奮してしまう早く結衣の全てをこの目に焼き付けたい、だがまだ焦らない、まだ結衣は小学生だゆっくりじっくり時間をかけないと結衣を壊してしまうかもしれない、そう思い俺は結衣の頬を触りながら答える

「うん全部、大人になるためだよ結衣ちゃんは、頑張れるかな？」

結衣は少し考え

「わかった、がんばる…」

そう言つて結衣はスカートの中のホックを外す、すると結衣のパンツが見える、結衣は顔を真っ赤にして、少し泣きそうな顔で俺を見つめる、だが覚悟を決めたようで、両手でショーツの両端を持ち少しずつ下ろしていく、その光景があまりにもエロくて俺は生唾を飲み込んだ、そしてついに結衣の全てが露出される、毛が一切生えておらずツルリとした割れ目が姿を現す、その瞬間を見逃すまいと思ひ目を凝らす。

結衣は自分の股間を隠すように手を伸ばすがそれを制止しようと、結衣は目をぎゅつとつぶり羞恥に耐えていた。

「恥ずかしいよお、大志兄ちゃん……」

結衣のその言葉を聞きさらに俺の興奮は高まる、すごい背徳感だ

「でも大人になりたいんだよね？　結衣ちゃん？」

そう聞くと結衣は少しの間沈黙してから、目を開き潤んだ瞳で俺を見ながら小さな声でぽつりと

「……なりたい」

「じゃ俺のおちんちんに触ってもらってもいいかな？　大人になれる準備なんだ」

そう言いながら立ち上がり、俺はズボンと下着を下ろすと既に半分勃起した俺のモノが結衣の目の前に現れる、それを見た結衣は大きく驚き、同時に恐怖を感じたような表情を見せる。

「うわあ……お兄ちゃんのおちんちん、おつきい…同級生の男の子よりすごい…
そ…」

結衣は恐る恐る俺のモノに触れる、ビクンと脈打つ感覚に驚いたのかすぐ手を離してしまった、だがまたゆっくりと触れてくる、俺は結衣ちゃんの手を握り、俺の手で包み込むようにして握らせる、そして上下に動かし始めた結衣はびっくりして俺の顔を見上げるが、俺は気にせず続けて完全に勃つように導く。そして数分後には完全に立ち上がっていた。俺は改めて結衣の方を向くとそこには驚愕の表情を浮かべた結衣がいた。

「これが……大人の男の人のおちんちんでいいの……？、さつきより大きい
ね…」

正直なところ、ここまで大きくしたのは結衣が初めてだ、

「これは結衣ちゃんが可愛いから、大きくなったんだよ？ さあこっちにおいて」

そう言つて先ほどのように胡座をかいで結衣を足の上に座らせ、俺は後ろから抱き抱える形になり、結衣は俺に体重を預けるように寄りかかり、こちらをチラリと見てくる

「じゃ次は、俺が結衣ちゃんの大人になる準備をお手伝いするね、身体を触つても大丈夫かな？」

結衣はコクリと首を縦に振る、それを確認して俺は結衣の背中から腰にかけて優しく撫でる、それだけで結衣はピクつと反応し、緊張してるのか吐息を漏らしている。

それから俺は結衣の胸に手を這わせて、優しく揉みほぐし始める、小さいながら薄らと膨らみを感じる、そして時折先端を指先で弾いたり摘まむ、その度に結衣は体を震わせる、俺は結衣の耳に口を近づけて囁く

「結衣ちゃん、気持ち良い？」

すると結衣は顔を赤くしながらも小刻みに震える声で返事をする

「わかんない…わかんないよお……大志兄ちゃん……なんか変な感じする……」

その答えを聞いて俺は結衣の小さな胸を優しく撫で続ける、結衣は体を振らせ
て悶える、俺は結衣の乳首を親指と人差し指で挟み、コリつと擦る、すると結
衣は一際大きな声を上げる

「ひゃあつ……!!」

そのあと俺は執拗に結衣の胸を攻め立てる、時々強くつまんだり引つ搔いて
やると後ろからでもわかる結衣の耳が真っ赤だ。

そして次に太ももをさわり始める

「大志兄ちゃん……そこはだめえ……」

そう言うのと結衣は足を閉じようとするが俺が無理やり開かせる。結衣の小振り

な秘所が露わになり俺はそこに優しく触れる。

結衣は俺の手を掴み止めさせようとするが俺は構わず、ゆっくりと割れ目をなぞり始める、すると結衣は体を強ばらせた、俺は結衣の耳元で再びささやく
「結衣ちゃん、ここが女の子が大人になる場所だよ？ 分かるかな？」

そう言うとき結衣は小さくコクリとうなずく、俺はそのまま中指をゆっくりと挿入していく、結衣は一瞬苦しそうにするが、俺が頭を撫でると落ち着いたのかまた力が抜けた。

結衣の中はとても狭くきつく締め付けるような感触だった、結衣はというと違和感を感じているのか、しきりと体をくねらせている

「結衣ちゃん痛くない？ 大丈夫？」

そう聞くと結衣はコクリとうなずく、俺は結衣の頭と体を撫でながらゆっくり

と出し入れを繰り返す、すると次第に結衣の声に変化が訪れる。

「んっ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

最初は痛みに耐えるような声だったが、今では甘い吐息が漏れている、結衣は目を閉じているものの、口が半開きになっていて、息が荒くなっている。

そして俺は結衣の胸をいじり始める、最初は優しく、徐々に激しくしていくと結衣の体がビクビクと痙攣し始めた。

「ああ……はう……大志兄ちゃん……もうダメ……何か来ちゃう……怖いよ……」

そう言われても俺の責めは止まらない、むしろ激しさを増していく、すると結衣は一段と高い声を上げて絶頂を迎えたようだ、全身がガクガクと痙攣し息も

絶え絶えになっている

「はあ……はあ……はあ……大志……兄ちゃん……はあ……はあ……」

結衣は俺にもたれかかってくる、俺はその様子に満足しながら頭を撫でつつ次のステップに移ることにする。

オトナにしてくれるの?お兄ちゃん?春編

発行日 2023年4月18日

著者 野菜箱

<https://www.pixiv.net/member.php?id=6115077>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
